

## 母親の養育態度測定法の研究

——カウンセリングのためのテストの標準化——

金平 文二・鈴木 裕子

(昭和55年9月30日受理)

The Study of Measurement Method for Nursing Attitude of Mother

—Standardization of Test for Counselling—

Bunji KANEHIRA and Yūko SUZUKI

(Received September 30, 1980)

### はじめに

“日本の時代”といわれる80年代はスタートした。追う者から追われる者への立場の転換に伴い、より強力な精神的圧力を感じざるを得ない状況である。物質的な飽和状態を経て、今や精神的向上をめざし、より高次の人間的な価値の追及、生き方の志向性へと発展したといえる現状にあって一段と人々の不安や悩みは深められている。このような現代に対応すべく各種の相談機関では様々なカウンセリングが展開されており、技法も種々開発されてきている。親子関係についても臨床的な研究は従来より数多くなされてきており多くの示唆を得ることができる。相談機関としても児童相談所をはじめ、保健所、私設の心理相談室、病院などで、また小学校・幼稚園・保育園において専門の知識や経験に基づいたカウンセラーや教師によって広く実施されてきている。

核家族化の浸透、子ども数の減少、母親の社会への参画、住居、生活様式の変化など変遷著しく、このような変化はまた親と子のかかわりにも多大な影響を与えているといえる。近年の特徴的な傾向としては母性の喪失、父親の存在と役割の変化、母源病、心身症者(児)の増加、非行の年少化、自殺、反抗、暴力などといった現象をとりあげ、精神分析的な見地よりその背景にある歪んだ親子関係の一面をとりあげ現代の親子関係の問題点を論じることが多くなされている。さらにこのような状態の中で新しい建設的な親子関係の樹立をめざす“親業”という考え方も世論をにぎわしているようである。人生50年といわれた時代は遠く、今や70年とも80年と

もいわれており、高齢化社会への突入を目前に控えている現状である。生の時間的な拡がりには希望と夢を抱かせる反面、不安や悩みを増大させてきている。来たるべき高齢化社会をになう子ども達への関心も強まってきており、人間としての基礎づくりの時期にある幼年期の人間関係のあり方はより深刻に考えられてきているのである。

本研究ではこのような現状をふまえ、各家庭(族)の背景を熟知し、個別的なフィードバックを必要とする親子関係のカウンセリングの実施にあたって、その基礎資料として活用することを意図した母親テストの作成を究極の目標として着手したものであるが、今回の報告はその第一報としてテストの標準化への基礎的な資料の報告をするものである。

### 研究方法および手続

#### 1. 調査票の作成

従来の親子関係に関する研究結果、および母親テスト(本明 寛著、ごま書房)を参考に、日常生活場面をとりあげ、母親の幼児への接し方についての質問項目を検討し作成する。

回答は、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の三肢択一とした。

予備調査は、昭和53年11月~12月にかけて、385名を対象に実施した。この結果を集計分析し、6分類11項目(計66項目)からなる質問紙調査票を作成した。

回答はマークカードに直接記入してもらうため、回答シートも合わせて作成する。

#### 2. 子どもの行動についてのチェックリストの作成

子どもについて 1. 依存的である 2. 情緒が安

定している 3. 攻撃的である 4. 根気強い 5. 生活習慣をよく守る 6. 意欲的である 7. 好奇心が強い 8. 自己中心的である 9. 大人びたところがある 10. 内向的である, 以上の10項目について幼稚園または保育園のクラス担当の教師に一人一人の子どもについて5段階で評定をしてもらった。評定項目については、保育の場面で比較的評定しやすいと思われる項目でしかも質問紙調査票との関連から決定した。

## 2. 実施方法

調査票・回答カード・記入要領の説明書を一組として、幼稚園・保育園に依頼し、幼稚園・保育園の教師を介して各家庭に配布した。

実施日時 昭和54年6月～9月

対 象 東京都内のS幼稚園・M幼稚園  
東京都内のK保育園、N保育園・S保育園・宇都宮市のM保育園に通園している  
子どもの母親、計1140名に配布した。

回 収 900部(78.95% 回収率)  
データ使用数 828部(72.63%)であった。

### 結果および考察

質問紙調査票によって得られた結果から母親の子どもへの態度を下記の6パターンで採点し各母親の養育態度を決定する。各6パターンの特徴は下記に示すとおりである。

#### A 甘やかしタイプ

何でも子どもの言うとおりに思うとおりにさせるタイプで子どもへの服従傾向が強い。

#### B 過干渉タイプ

何かにつけて子どもに干渉し、親の思いどおりに子どもを育てようとする傾向が強い。

#### C 放任タイプ

子どもに対して関心を示さず、自分のペースを守って生活している。

#### D 自立心助長のタイプ

子どもの中から出てくる伸びようとする力をうまく汲みあげ、のばすように補助する。

#### E 躰優先のタイプ

日常生活習慣の樹立を第一義的に考え、一定の型にそって子どもを育成している。

#### F 情緒配慮のタイプ

子どもの気持、感情を大切に、子どもの立場に立って何ごととも解決をはかろうとする。

各質問の回答は上記の6パターンのいずれかに該当するものであり、回答毎に1点ずつ配点し、各パターン別の得点を算出した。

得られた結果は表1のとおりである。

パターン別の全体的傾向をみると、Eパターン項目の選択率が高く、Cパターン、Dパターンの選択率は低くなっている。つまり母親の中に、「しつけ優先」の養育態度を実践している人が多く、甘やかし、過干渉といった、一般的に子どもの養育態度としては好ましくないとされている態度をとることは少いことが伺える。3歳から6歳という人間としての基礎づくりの段階において、子どもの社会化を目指し、うまく社会に適応していくよう素地の育成を目標として養育にあたる傾向が強い。

次に各パターンの出現とその特徴的傾向だけを強くもっている母親(それぞれ純型の甘やかしタイプ(A型)、純型の過干渉のタイプ(B型)、純型の放任タイプ(C型)、純型の自立心助長タイプ(D型)、純型の躰優先タイプ(E型)、純型の情緒配慮タイプ(F型)で各傾向をう素地とのかかわりの中に強く反映させている母親)をとりあげて考察をすすめることにする。

表2はパターンの該当者、表3は各パターンの中より純型の母親だけを選び出したものである。

全体的な傾向をみると、Fパターン志向性の強い母親が多く、次いでCパターン、Aパターンと続いており、EパターンやBパターン、Dパターンと志向性は低くなっている。

このことは、現代の幼児をもつ母親は、子どもの情緒への配慮をまず考え、子どもに対応していくという傾向が強いことが察せられる。子どもにとって何より大切なのは情緒的な安定感を得ることであり、その土台の上に自主性、社会性といった個々の特性が培われていくのである。望ましい人格の成長や発達を目指す過程において情緒の安定は欠くことのできないことであり、この点を考え合わせても好ましい傾向といえる。

しかし次いで多い放任タイプ、甘やかしタイプについてみると、「放っておいても子どもは育つ」といった養育観が親の無責任な行動をひきおこし、さらにこの傾向に拍車かけられるべく、われわれの現在の生活環境がある。母親の活動の場は従来に比べかなり拡大されてきている。家事の簡易化女性の価値観の変容に伴い家庭に

母親の養育態度測定法の研究

表1 パターン別得点

			A	B	C	D	E	F
3 歳	男	M	7.489	11.42	6.644	10.713	13.333	9.844
		SD	2.227	3.166	2.810	2.604	3.091	2.641
	女	M	7.000	11.090	6.857	10.462	13.294	10.290
		SD	2.318	3.074	2.840	2.297	2.689	2.275
4 歳	男	M	7.392	11.077	7.608	11.314	13.231	10.501
		SD	6.913	2.816	2.495	2.366	2.966	2.443
	女	M	6.913	10.85	7.391	10.893	13.523	10.300
		SD	2.339	2.966	2.483	2.573	2.852	2.840
5 歳	男	M	7.314	11.380	7.059	11.025	13.443	10.293
		SD	2.602	2.983	2.248	2.480	2.988	2.667
	女	M	6.833	11.46	7.042	10.614	13.672	9.964
		SD	2.357	3.201	2.604	2.391	2.790	2.781
6 歳	男	M	7.469	11.77	7.297	10.396	13.411	9.938
		SD	1.992	2.919	2.541	2.643	3.096	2.633
	女	M	7.206	11.570	7.297	10.238	13.672	9.651
		SD	2.183	3.216	2.548	2.512	2.424	2.546
計	M	7.183	11.341	7.221	10.824	13.472	10.200	
	SD	2.342	3.000	2.470	2.493	2.891	2.614	

表2 パターン出現率

		A		B		C		D		E		F		計	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
3 歳	男	10	21.28	10	21.28	4	8.51	6	12.77	6	12.77	11	23.40	47	100.00
	女	7	26.92	3	11.54	6	23.08	3	11.54	3	11.54	4	15.38	26	100.00
4 歳	男	28	17.28	19	11.83	34	20.99	27	16.67	23	14.20	31	19.14	162	100.01
	女	18	13.64	16	12.12	29	21.97	21	15.91	20	15.15	28	21.21	132	100.00
5 歳	男	39	22.03	26	14.69	23	12.99	28	15.82	27	15.25	34	19.21	177	99.99
	女	24	15.19	25	15.82	28	17.72	20	12.66	30	18.99	31	19.62	158	100.00
6 歳	男	9	14.52	11	17.74	15	24.19	6	9.68	10	16.13	11	17.74	62	100.00
	女	8	15.09	13	24.53	11	20.75	6	11.32	9	16.98	6	11.32	53	99.99
計		143	17.50	123	15.06	150	18.36	117	14.32	128	15.67	156	19.09	817	100.00

だけ目が向いていた頃とは異なり、有職者の増加レジャー産業の浸透が主婦を家庭から解放している。母親の自己理想化、遊び人間としての生き方の犠牲者ともいえるべき子どもも少なくはないのである。さらに甘やかしの傾向についても子供数の減少化と相まって子どもの言うなりに子どもに服従している親が多くなってきているといえる。

次に純型の傾向についてみると次のようにいえる。純型の母親にはC型・E型が多く、次いでB型・A型・E型で、D型はもっとも出現率が低いパターンであった。嫉優先型と放任型とが共に多く、放っておいて育てる親と厳しくスパルタ式に養育していこうとする両極の親の養育態度の多いことが興味深い。このような両極の併行について考えるならば、子どもをどう育てるのかの親

表3 純型パターン出現率

		A		B		C		D		E		F		計	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
3歳	男	2	8.70	7	30.43	1	4.35	5	21.74	4	17.39	4	17.39	23	100.00
	女	5	31.25	2	12.50	5	31.25	2	12.50	1	6.25	1	6.25	16	100.00
4歳	男	6	11.11	9	16.67	10	18.52	9	16.67	14	25.93	6	11.11	54	100.01
	女	5	8.93	7	12.50	17	30.36	5	8.93	12	21.43	10	17.86	56	100.01
5歳	男	15	23.44	11	17.19	6	9.38	10	15.63	13	20.31	9	14.06	64	100.01
	女	11	15.94	11	15.94	15	21.74	8	11.59	12	17.39	12	17.39	69	99.99
6歳	男	3	10.34	4	13.79	9	31.03	2	6.90	4	13.79	7	24.14	29	99.99
	女	3	15.00	4	20.00	3	15.00	3	15.00	6	30.00	1	5.00	20	100.00
計		50	15.11	55	16.62	66	19.94	44	13.29	66	19.94	50	15.11	331	100.01

も悩み、良い方法といわれるものがあれば次々とそれを取り入れていってしまう。自分の子どもに合わせた養育態度をなかなか実施できない状況に親自身が悩み、迷っているのではないと思われる。

また養育対象者が3歳～6歳という時期の子どもであるため自立心を助長するという養育態度はとられにくい傾向を示しているといえる。幼年期の自主性の育成は、放っておいて育つものでもなく、手をかけすぎてもうまく伸びずといった養育上の難しい課題である。また、自由な中で伸びのびと子どもの備えているものを開花させてやりたいという願望は強くあっても、生活空間や活動範囲の限定によって否応なく子どもを規制してしまいがちであり、子どもによかれとわかっていても実際にはできないという現状であることもこのような結果の誘因と考えられる。

さらに母親の年代、子どもの数、職業の有無と各パターンとの関係もみたが母親の年代と各パターン間にも有意差が認められた ( $\chi^2=21.721$   $df=10$   $.025 < p < .001$ )、つまり、20代の母親はC・Dパターンを志向し、30代ではEパターン、40代ではEパターン・Bパターンを志向するといえる。20代の母親はまだ自分のやりたいことや楽しみたいことが優先されがちであり、子どものことよりも自分自身の楽しみを先行させる母親と子どもの成長を楽しみながら子育てをしている母親の二種のタイプが代表的なものとしてあげられる。また30代になると躰優先のタイプが多くなる。子ども数の増加、有職者が多いといった傾向もよりこのタイプの出現にプラスに働いていると思われる。さらに40代では躰優先と過干渉型

が多く認められる。

その他子どもの数とパターンとの関係では子どもの数が少ない方が甘やかしや過干渉といった子どもに積極的にかかわろうとし、逆に子どもの数が増えたと躰優先とか放任とかといったかかわり方を示す傾向がみられる。

さらに保育施設、子どもの性別、年齢とパターンとの関係も検討してみたが、きわだった関係は認められなかった。以上のことは、保育園、幼稚園に通園する子ども達の経済的社会的家庭的背景の均一化によること、男女平等による対等の扱い、子どもの年齢による接し方の使い分けがないということが示唆されたわけである。すべて平均化されてくる傾向の強い時代を反映しているような結果になったともいえるのである。

次にテストの妥当性を測るために各パターンと教師の評価による子どもの性格特性との関係をみていくことにする。

前述したように、5段階で評定されたものに5点・4点・3点・2点・1点と配点し、各パターン別の子どもの性格得点を算出したものが表4である。

さらにパターン別の子どもの性格特性に有意な差が認められるかどうかをも合わせて検討した。

依存性についてはパターン間の明確な差は認められないが、甘やかし型の養育態度をとっていると子どもは依存性が強くなりやすく、また、躰型の養育態度に依存的な面が少ないという傾向がでている。甘やかしと依存ということは従来の研究でも関連が深いとされている。甘やかすということは気づかぬうちに自立の芽をつみとってしまうことであり、自分から何かをしようという気持

表4 子どもの性格特性×母親の養育態度

		A	B	C	D	E	F	P>.10	P>.05	P>.01
依存的である	M	2.939	2.673	2.892	2.705	2.646	2.880			
	SD	1.114	1.222	1.165	1.035	1.029	1.296			
情緒が安定している	M	3.204	3.109	3.077	3.000	2.985	3.180			
	SD	0.755	0.928	0.847	0.778	0.774	0.973			
攻撃的である	M	2.122	1.800	2.215	2.182	1.938	2.040	A>B	B<C、B<D	
	SD	0.961	0.772	1.157	0.960	0.857	1.113			
根気強い	M	2.898	2.890	2.723	3.091	2.954	3.140		C<F、C<D	
	SD	1.035	1.073	0.920	0.949	1.029	1.166			
生活習慣を守る	M	3.286	2.891	3.092	2.432	3.246	3.500		C<D、A>B	B<F、B<D
	SD	0.881	0.908	0.759	0.780	0.823	0.831		B<E	C<F
意欲的である	M	3.041	2.891	2.800	2.977	3.015	3.200		C<F	
	SD	1.068	0.908	0.948	0.866	0.903	0.959			
好奇心が強い	M	3.408	2.818	2.908	2.841	3.200	3.240	C<F、D<F	B<E、B<F	
	SD	0.988	0.765	0.940	0.952	0.980	1.031			
自己中心的である	M	3.633	3.436	3.215	3.614	3.492	3.360		C<D	
	SD	1.155	1.092	1.030	0.910	1.054	1.213			
大人びている	M	3.286	3.927	3.631	3.568	3.908	3.300	B>D		B>F、E>F
	SD	1.050	0.988	1.197	0.963	0.890	1.136			
内向的である	M	3.286	3.273	3.200	2.932	3.154	3.360	D<F		
	SD	1.050	1.135	1.126	1.214	1.153	1.127			

を減退させてしまうことになるので注意を要すると思われる。

情緒の安定性については、依存性と同様にパターン間の明確な差は認められないが、甘やかし型の養育態度は情緒のより安定した性格の子どもを育成し、嫉妬先型の養育態度は情緒の安定をより低くするという結果が得られた。甘やかすということはそれによるマイナス面もさることながら、十分に母親に受容されているという安定感は何にも増して子どもの健全な発達に重要な要因である。反面、嫉妬先型の場合には子どもを受容する前に母親の価値観で求めた一定の鋳型の中に子どもを押しはめようとする傾向が強く、子どもの感情を十分に受けとめきれないという面があるのではないだろうか。幼児期を卒業する前に十分母親との愛情交換を経て来た者の方が後々の問題が少ないということからも、この時期の情緒の安定をはかるといことは大切なことであると思われる。

攻撃的であるという特性については、過干渉型より放任型、自立心の助長型の方が強く、また甘やかし型の方

が強い傾向にあることが伺える。攻撃ということを考えて場合、その行動の背景となっているものは数多く考えられる。放任型においては、子どもは自分の存在を顕示するため、また無視しないでほしいという意図のもとに存在感の確認の意味をこめて攻撃という暴力的な手段で訴えているのである、自立心助長の場合には、早く大きくなれ、早く大人になれという願いをこめた大人の対応に対する一種の警告を送ってきているのではないだろうか。また過干渉にこの傾向が少ないというのは、児童期以降のように自我の萌出が活発になってくると干渉されることへの反抗として攻撃性が生まれてくるが、まだそれが十分でない幼児期であり、手をかけられざるをえない過程の中で、むしろ自分にかかわってくれることへの満足感が優先されているためではないだろうか。

根気強さについてみると、放任型よりも自立心助長型情緒配慮型の方がその傾向が強いということが認められた。子どもの養育に無関心な放任型では、子どもは教育的配慮を得られぬままに自由に活動している。マイペースの生活の中では根気が培われる機会は少ないといえる。

自立心助長型や情緒配慮型では、子どもの成長にそって好ましい環境が設定され、興味の集中が計られ、その中で自主的に根気を養うということがなされているのではないだろうか。放っておくだけでは何も育たず、むしろ失なうものが多い、環境の設定の大切さがここにもあるのである。

生活習慣を守るということについては、過干渉よりも甘やかし、自立心の助長、躰優先型、情緒配慮型の方がよく守り、また、放任型よりも自立心の助長型、情緒配慮型の方がよく守っているといえる。過干渉や放任という養育態度は、どちらも子どもの発達を阻害する要因としてあげられている。過干渉においては極端な場合、母親の指示をうけなければ行動がとれないというロボット人間を作り上げてしまい、また、放任の場合には基本的な生活習慣すら伝授されずに放っておかれるという状態である。日常の行動様式の見本となる者の不在感のごく普通の日常の行動の獲得すらも困難にしているのである。

意欲的ということについては、情緒配慮型の養育態度の子どもの方が放任型の子どもより意欲的であるという結果を得た。物事に対する意欲はその動機づけの強さによってかなり規定されてくる。情緒配慮型においては、子どものその時の状態を押しはかりながら、子どものヤル気を引き立たせるといふかわり方をする。しかし放任型の方は、子どもの状態など無視し、大人の尺度で外側から傍観していることが多い。本質的にヤル気をひき起す場合とそうでない場合との差がこのような結果をまねいたと思われる。

好奇心については、過干渉型より躰型、情緒配慮型が高く、また放任型、自立心の助長型より情緒配慮型の方が強いといえる。好奇心は知りたい、やってみたいという未知のものに対する気持である。過干渉な親の元では行動の制限をうけることから、危険である、汚ない、好ましくない環境は大人の側で処理されてしまい、子どもへの刺激はかなり制限されてしまう。同質の刺激しかうけることができないと考えられるこのような状況では発動しにくいものである。新鮮なおどろきが原動力である好奇心は未知への冒険を实践しようとする精神的な安定が土壌になって起ることである。そしてこのことが次の成長をひき出していくもとなのである。

自己中心的傾向については、放任型よりは自立心助長型にその傾向が強くと認められる。放任されている子どもは母親以外のどこか、何かに安定の場を見い出そうとす

る。その結果歪められた自己を形成し、周囲と摩擦なく調和をはかっていこうとする特性があらわれる。しかし幼児期は一過性の特性である自己中心的傾向の時期を経てより高次の精神機能を発達させていくのである。また何でも自分でやることを奨励されている自立心助長型の子どもは、判断基準を早いうちから自分の中にもち、何ごとも自分でという姿勢が自づと自己中心的な傾向を強化していくと思われる。

大人びたところがあるという特徴については、過干渉型、躰優先型の母親をもつ子どもの方が情緒配慮型の母親の子どもよりもその傾向が強くと認められる。情緒配慮を心がけている親は、子どもの状態に合わせて働きかけをするため無理に子どもに背のびをさせることがなくてすむ。過干渉型や躰優先型の親は大人の価値基準で子どもの行動を推し測ってしまうため、大人のミニチュア版の子どもを養成してしまう危険がある。子供本来の無邪気さ、純粋さはその後の成長に果たす役割は大きい、無理に大人に合わせた子どもを作り上げてしまうことは子どもにとっては大きな損失なのである。

最後に内向性についてみると、パターン間で差は認められないが、自立心の助長型の子どもにおいて内向性が低い傾向のあることが伺える。自立心の助長型という養育パターンによって子どもは自分で歩いていく人間へと早期のうちから志向させられる。人間社会の中では他の人間との関わりを友好的にしていくことが社会生活への適応につながっていく。そのようなことからいっても内向的な傾向は低くなると思われる。

以上、本データより得られた結果に基づき、パターン別に子どもの性格特性との関連をみてきた訳であるが、どのパターンが一番よいか、悪いかという唯一絶対のものはない。いずれのパターンもそのプラス面が作用する場合、マイナス面が作用する場合と両面価値的な性質を持っている。いずれの特性がひき出されて作用するかは個別的問題であり、母と子の力動的な関りの中で決定されていくものであると考えられる。

次に、各パターン内の上位群・下位群と子どもの性格との関係についてみることにする。

$\chi^2$ 検定によって得られた結果は表5のとおりであった。明らかに傾向の認められたものについて分析してみたいと思う。

放任型と子どもの意欲とは関わりのあることが認められた ( $\chi^2=4.306$   $p<0.05$ )

表5 養育態度と子どもの性格

	A	B	C	D	E	F	$\chi^2$
依存的である	1.102	0.416	0.745	0.324	0.638	1.274	* P<0.01
情緒が安定している	0.188	0.666	5.357	0	0.079	1.091	** P<0.05
攻撃的である	0.011	2.374	0.395	0.948	0.410	0.151	
根気強い	0.003	0.240	2.040	1.423	0.725	0.894	
生活習慣を守る	0.763	0.258	0.477	0.087	0.573	0.021	
意欲的である	0.001	4.306	2.619	0.164	0.197	4.360	
好奇心が強い	1.243	4.568	1.985	0.064	3.038	0.925	
自己中心的である	0.250	0.290	0.096	0.370	2.280	0.514	
大人びている	0.277	0.397	1.597	0.25	0.446	3.568	
内向的である	1.252	0.096	0.463	0.061	0.438	3.423	

放任型は物事に対する意欲が低く、非放任型の子どもは意欲が高い。つまり放っておいては子どもの意欲は育たないのである。親からの適度な刺激、賞賛、承認といったようなかかわりがぜひとも必要なのである。

さらに放任型と好奇心についても同様に認められた。 $(\chi^2=3.038 p<0.10)$

過干渉型と情緒の安定性についても関係は認められた。 $(\chi^2=7.450 p<0.05)$ 。子どもへのかかわりをもつということは子どもの発達上非常に有意義なことなのである。様々な面で親の介助がまだまだ必要な時期で、親とのかかわりの密度の濃さが子どもの情緒の安定をかもし出すということがいえる。どういう形でも相手になってもらえる人がいるということは子どもの性格の発展に大きな影響を与えるようである。

さらに自立心の助長型は子どもの意欲を推進させることも明らかになった。 $(\chi^2=4.360 p<0.05)$ 、自立心をはかるべく適当な働きかけをすることは子どもの意欲をおおいにふるいたたせるようである。

その他傾向ありと認められたものは寝優先型×好奇心、自立心の助長型×大人びている傾向、自立心の助長×内向性という項目であった。

### 要 約

以上のようにカウンセリングのための基礎資料とするテストの試みについて述べて来たが、まだ研究途上ということもあり、十分な結果は述べられなかったが、パターンの規定、子どもと母親の態度との間に多少関係がみい出されたことなど、今後の研究に示唆するところはあった。個別的であり流動的である人間関係、とりわけ著

しい成長をとげる幼児期を対象としての母子関係を考えていく時、養育の質と型の変容は子どもの行動の変化にかなりかかわりをもつものであるといえる。行動の変容を支える母親の接し方に注目ははらうことが必要であり、より好ましい養育態度がくり返し子どもに与えられ続けるということが必要である。そのような中で子どもの心の世界が豊かに展開し、母親と子どもの心理的な安定感のもとによる好ましい人格特性を獲得していけるのである。

### 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、調査の実施・回収にご協力いただきました各園の諸先生、ご父兄の皆様、ならびに橋本、両角の両氏に深く感謝いたします。

### 参 考 文 献

- 遠藤紘子他 幼児の適応と母子関係 最近育児の理論と実際 VOL. 2 p. 17—20 (1977)
- 加藤澄子他 母親の養育態度の変容に関する研究(Ⅱ) 日本保育学会第30回大会研究論文 p. 298—299 (1977)
- 久徳重尽 「母原病」教育研究社 (1979)
- 石井哲夫他 「子どもの心と育て方」小学館 (1967)
- 乾 孝 「子どもの生活としつけ」小学館 (1969)
- 小嶋謙四郎 「母子関係と子どもの性格」川島書店 (1969)
- 本明寛 「母親テスト」ごま書房 (1972)
- 坪田敏一 「新しい親子関係のあり方」暁書育図書 (1966)

高橋省己 「親の養育態度と子どもの性格」

最近育児の理論と実際 VOL 2 p. 175—178 (1977)

高島節子 「幼児の性格診断検査からみた親のしつけ親  
のしつけ態度」

日本保育学会第29回大会研究論文 p. 109—110 (19  
76)

横山正帯・秋山幹男他

「母親の育児観および養育態度と幼児の自主性の関  
係(I)(II)

日本保育学会第回大会研究論文集 (1980)

依田新編 家族の心理 培風館 (1966)

---